

ハイディ

(第十六回)

津田芳雄譯

——お父さんは息子を見るに、かはいさうでたまらなくなつて、駈け出して行つて抱きしめました。息子は、『わたくしは天に對しても、お父さんの目の前でも、罪を犯しました。もはや息子と呼んでいただくねうちはありません』こいひますが、お父さんは召使ひ達に吩咐けました。『一番よい著物を持つて来て着せてやれ。指には指環を、足には靴を著けてやれ。一番よく肥えた襪を履り、料理して來い。みんなで楽しく食べようぢやないか。わしの死んだ息子が生き返り、ゐなくなつてゐたのが歸つて來たのだが』そこでみんなは、大よろこびでお祝ひをしました。

——ねえおぢいさん、美しいお話でせう?。

ハイディはおぢいさんが、きつこびつくりして悦ぶだらうと思つてゐたのに、一言も口を利かず

に坐りつづけてゐるので催促をした。

「おお、全くお前のいふ通りぢや、美しい話ぢやのう」

おぢいさんは答へたが、非常に眞面目な顔をして考へ込んでゐるので、ハイディも黙つて繪を見てゐた。やがてその繪をしづかにおぢいさんの前に差し出し、

「ほら、さてもうれしさうにしてゐるでせう?」

さ云ひながら、お父さんから又いただいた立派な著物を著て、うれしさうにお父さんのそばに立つてゐる「歸れる蕩兒」の姿を指さした。

二三時間して、ハイディが眠つてしまふに、おぢいさんは梯子をのぼつて行き、ハイディの顔がよく見える所にランプを置いて、ちつこその寝顔に見入つてゐた。お祈りを云ひながら寢入つてし

まつたのか、手は組み合はされたままで、小さな顔には何もかも任せ切つた安らかさがただよつてゐた。おじいさんは深く感動した様子で、長い間そこに立ちつくし、無言でちつき眺め入つてゐた。やがておぢいさんも手を組んで、頭を垂れて云ひはじめた。

「神様、わたくしは天に對し、あなたに對し、深い罪を犯しました。到底あなたの息子ミ呼んでいただくねうちにはございせん」

大粒の涙が二すぢ、おぢいさんの頬をつたつて流れ落ちた。

翌る朝早く、おぢいさんは小屋の前に立つて、しづかにあたりを眺めてゐた。朝の清々すがすがしい太陽が、山にも谷にも輝いてゐた。はるかに谷をわたつて、教會の朝の鐘がひびいて來て、小鳥は椈の木で朝の歌をうたつてゐた。おぢいさんは小屋にもぎつて、ハイディを呼んだ。

「出ておいで、ハイディ。お日様がのぼつたよ。一番いい著物を著て來なさい。これから教會へ行くのぢや」

ハイディはすぐに支度をして出て來た。こんなお呼びはいつにないこみなので、大いそぎで來た

のだつた。ハイディは氣の利いたフランクフルト仕立ての服を著てゐたが、おぢいさんを見るまゝ、びつくりして立ち止まり、大きな聲で叫んだ。

「まあ。おぢいさん！ おぢいさんのそんなにしていらつしやるの、わたしはじめてよ。あら、上衣に銀のボタンがついてゐるわね。おぢいさんは、いいおべを著るまゝ、さてもすてきだわ」

おぢいさんは微笑みながら答へた。

「お前もなか／＼きれいちや。さあおいで」

おぢいさんはハイディの手をひいて、山道を下つて行つた。あちこちから教會の鐘がひびいて來て、村へ近づくにつれ、ますますその音は、高くゆたかに鳴りわたつた。ハイディはうれしさうに耳を傾けた。

「ねえおぢいさん、お聴きなさいよ、まるでお祭りみたいね」

ハイディとおぢいさんがデルフリデルフリの村の教會へ這入り、後の席うしろに腰かけた時は、もう信者たちは集つて、讚美歌を歌ひはじめてゐた。けれどその歌も終らないうちから、みんなは互ひにうなづきながら、囁き合つてゐた。

「こらんよ、アルムをぢさんが、教會に來てる

よ！」

やがて教會ぢうの人にこのこゝが傳はつて、女の人たちは何度も振り返つて讚美歌をまちがへたりした。だがやがてお説教がはじまり、牧師さんが力をこめて、温い感謝に満ちた調子で話したので、みんなはなにか大きな喜びが訪つれたやうに感動しながら、熱心に聴き入つた。

禮拜がすむと、おぢいさんはハイディの手をひいて牧師さんの家へ行つた。みんなは珍らしさうにそのあきを見送り、中にはおせつかいにも、わざ／＼ほんたうに這入るかぎうかを見届けに、ついで行つた者さへあつた。おぢいさんは這入つて行つた。するさみんなは思ひ思ひに環になつて、この不思議な出来事を話し合ひながら、一體おぢいさんが何を思ひ立つて、山を下りて教會へなきて來る氣になつたのか、さつぱり見當もつかないの、今におぢいさんが怒つた顔をして出て來るか、それとも穏やかに何事もなく出て來るか、ぢつと牧師さんの家の玄關を見張つてゐた。中には又、あの人も思つたほごわるい人ではなかつたのだ、子供の手をあんなにやさしくひいてやつてゐるまゝころを見てわかるではないか、と云ひ出すもの

もゐた。するさみんなも口々に、自分達の思ひすごしであつたのかも知れぬ。しんからの惡黨ならば、牧師さんの家へなき、怖ろしくて這入つて行けるものではないのだから、なきと云ひ合つた。水車小屋の粉挽きは、ここぞきばかり進み出た。

「だからわしは、初めつからさう云つてゐたぢやないか。おぢいさんが酷い不親切な人間で、あの子が怖がつてゐたのなら、何も結構な暮しを振り捨て、わざ／＼歸つて來るわけがないぢやないか」かうしてみんなは、だんだんおぢいさんに親しい氣持を持ちはじめた。するさ女たちはまた、ペーテルやおばあさんから聞いて來た話をはじめたので、おしまひには、まるで長い間きこかへ行つてゐた古い友達をでも待つやうな氣持で、みんなは立ちつくしてゐた。

その間、おぢいさんは、まづ牧師さんの家の書齋の戸を叩いた。牧師さんは出て來て、少しも驚かずに、まるで豫期してゐたやうにおぢいさんを迎へた。多分教會で姿を見たのだらう。この思ひがけぬ温いもてなしに、おぢいさんは最初言葉も出なかつたが、やがて心を落ちつけて云つた。

「わたしは、いづそやああなたがわざ／＼お訪ね下

さつた時申し上げた失禮な言葉を水に流していた
 だけ、あなたの御親切な御すすめにかたくに楯
 ついたこゝを許していただくと思つて伺ひまし
 たのぢや。やつぱりあなたの仰しやつたこゝは、
 間違つて居りませんでしたわい。わたしはあなた
 の御すすめ通り、冬の間はデルフリ村の家を見
 付けて住むこゝに心を決めました。あの子には、
 山の上の酷い寒氣は無理ですわい。村の人が、わ
 たしを信用のおけぬ奴ぢやと白い眼で見るとやうな
 こゝがあつても、それはもごく、薄いた種で、致
 し方もありませんわい。まあ、あなただけは、そ
 んなこゝもなさるまいと思ひますが」

牧師さんのやさしい眼には、見る／＼歡びが輝
 いた。しつかりとおぢいさんの手を握りしめ、心
 から云つた。

「よくぞ云うて下さつた。まつたくうれしいこゝ
 ですなあ。なんの、なんの、みんなも決してあん
 たに氣まづい思ひなき、させはしませんとも。わ
 たしにしてみれば、あなたは古い馴染みぢやし、
 又御近所づきあひが出来るさなれば、こんなうれ
 しいこゝはありません。ああ、今年の冬は、夜長
 にうん／＼昔話しが出來ますなあ。この小つちやい

「お方にも、お連れを見付けるさしませうかい」

さう云つて牧師さんはハイディの捲毛を撫でな
 がら、その手をひいて、おぢいさんご玄關の方へ
 歩いて行つた。みんなの立つてゐる所へ来てから
 お別れの挨拶をしたので、牧師さんがまるで親友
 ご名残りを惜しむやうにして、おぢいさんご握手
 をしてゐるのが、みんなにもよく見えた。おぢいさ
 んが戸を閉めて出て來るのも待ち遠しさうに、み
 んなはごつ／＼おぢいさんのこゝろへ押し寄せて、
 われ勝ちに握手をしようご手を差し出したので、
 おぢいさんはぎれからはじめていいか、迷つたく
 らるだつた。

「ほんたうに、ようこそ降りて来ておくんなさ
 つたなあ」

「昔のやうにお話し合ひたいご、せんから思つ
 て居つたんだよ」

なぎご口々に挨拶し、おぢいさんが冬の間だけ
 村へ来て、昔住んでゐた家に住まうご思つてゐる
 ごいふご、みんなは聲を揃へて喜んだ。昔馴染み
 の人たちが澤山途中まで送つて来て、いよ／＼お
 別れになるご、めい／＼が、今度降りて來た時に
 はきつご立ち寄つてくれご、おぢいさんに約束さ

せた。おぢいさんごハイディはみんなの後姿を見送りながら立つてゐた。おぢいさんの顔は、内から光りが射し照らしてゐるやうに、晴れ晴れと輝いてゐた。ハイディは澄み切つた眼でちつと見上げながら云つた。

「おぢいさんは、今日は段々段々きれいになつて行くのね。こんなおぢいさんを見たの、わたし初めてだよ」

「さう思ふかね」

おぢいさんは微笑みながら答へた。

「その通りなのぢや、ハイディ。わしは今日は勿體なくらる仕合せぢや。かうも仕合せな氣持になれるものごは思はなかつたよ。神様に素直に仕へ、人間ご仲よく暮らすごは、よいごごぢやなあ。お前をよこして下つた神様は、ほんたうによい御恵みを垂れて下さつたものぢや」

ペーテルの小屋に著くご、おぢいさんは戸を開けて、つか／＼と這入つて行つた。

「おばあさん、こんにちば。木枯しがやつて来る前に、そこ／＼少し修繕しておかねばなりませんなあ」

「おやまあ、アルムをぢさんぢやないかえ！」

おばあさんはびつくりして、大悦びで叫んだ。

「ほんたうに、長生きのお蔭だよ。あなたに一目會つて、お禮が云ひたい／＼と思つて居りました。いろ／＼ご何から何まで、ありがたうございました。こんな奇特なお方に、さうぞ神様のおむくいがありますやうに、おむくいがありますやうに」

おばあさんは、震へる手を差しのべした。おぢいさんは力をこめて握りかへすご、おばあさんはほもその手を握りしめて云ひつづけた。

「それから、心からのお願いがありますので。もしもわたしが、なんぞあなたの氣に障るやうなごをしても、さうぞわたしの目の黒い間は、その罰にあの子を遠くへ連れて行つてしまふやうなごだけは、勸辨して下されや。あの子はわたしには、かけがへのないいのちなんだから」

そしておばあさんは、ハイディをしつかりさかき抱くのだった。

「心配しなごるな、おばあさん、そんなごをすれば、わしだつて辛いごやから、決してしやしませんぞ、これからは、みんな一緒に暮らしますごや。いつまでもさう出来るやう、お祈りして下さい」

ブリギッタはおぢいさんを部屋の間へ呼んで、羽飾りのついた帽子を差し出し、ハイデイが無理にそれをおいて行つたわけや、子供にこんなものを貰ふわけに行かないことを話した。おぢいさんは少しも不機嫌な様子もなくハイデイを見返りながら、云つた。

「あの子のもちやから、被りたくなければ、あなたに進せてもかまはんぢやらう。さつさきなさい」

ブリギッタは大悦びで、帽子を高々さかざして眺め入りながら、

「ほんたうに、これはたしかに五圓以上はしますよ、ハイデイちゃんはフランクフルトへ行つて、いいことをしましたねえ。うちのペーテルも、しばらく奉公にでも出して見たらさ、時々思ふんですかねえ、さうでせう、をぢさん」

「さ云つた。おぢいさんはをかしさうに眼を輝かせながら、それもわるくはなからうが、まあ何かよい機会があるまで待つた方がよからうさ云つた。丁度この時、噂の主の常人が、飛び込んで来た。あわてて飛んで来たので、入口の戸にひきく頭をぶつつけて、家ぢうががたびしと鳴つた。息

をハアハアはづませながら、一通の手紙を差し出した。手紙が来ることをさ、めつたにないことをさ、これは今日の二度目の大事件だつた。手紙はハイデイ宛てで、デルフリ郵便局から配達されたものだつた。みんなは中味を聞かうと、テールのまわりに集つた。ハイデイはすぐに封を切つて、すらすらと読み初めた。クララからだつた。

ハイデイが歸つてしまつてからは、家ぢうが退屈でたまらないので、クララはお父様にお願いしてこの秋にラガツ温泉へ連れて行つていただくことにした。おばあさまもそこで落ち合ふ筈になつてゐるから、みんなハイデイとおぢいさんの住んでゐるお山へ訪ねたいさたのしんでゐる、さ書いてあつた。それから、おばあさまからのおこさづてさして、ハイデイがペーテルのおばあさんに白バンをお土産に持つて行つてあげたさは、大へんよいことをした。そのバンと一緒に飲んでいただくやうにさ、コーヒーを少しお送りしたから、あげて下さい。秋にはおばあさんにも是非お會ひしたい、さあつた。

みんなはこれを聞くさ、びつくりしたり喜んだりして、話はそれからそれへはづんだので、お

ぢいさんさへ時の経つのも気が付かないくらいだ

つた。みんなはそのうれしい日の来るのを楽しみにしつつ、更に今日のこのおぢいさんの来てくれたさいふ大きな喜びに、又してもひたるのだつた。

「なんに云つても、昔の親しい友達がまた訪ねて来て下さるごさほぎ、うれしいごさはないよ。親しい人は、いつかはきつご又、かへつて来てくれるご思ふからこそ、心がなごむのだよ。をぢさん、又近いうちに來て下さいよ。ハイディちゃん、あした又來ておくれだらうね」

おぢいさんもハイディも、心から約束し、別れを告げて山をのぼつて行つた。朝、降りて來た時にも教會の朝の鐘に迎へられたが、今又かへりには、丁度和やかな夕べの鐘に送られることになつた。山の上の小屋は夕陽をあびて、如何にも安息日らしい平和な姿をして立つてゐた。

おばあさまが秋いらしつたなら、ハイディにもおぢいさんにも、みんなに澤山の新しいよろこびや、びつくりするごさが起つて來るだらう。枯草の屋根部屋には、きつごほんもののベッドも造られるごさだらう。おばあさまが一度び足を踏み入れるごころ、必ず内も外も、不思議になにもかも

がきちんご整ふのだから。

十五、旅行のお支度

ハイディをうちに歸すやうに取り計らつて下さつた親切なお醫者様が、廣い通りをガーゼマン家の邸の方へ歩いてゐた。晴れた九月の朝で、誰の心もおのづご愉しくなるやうな、うららかなかがはしい朝だつた。それなのに、お醫者様はひさり始終眼を伏せて、一度だつて青空を見上げようごもしなかつた。せんにはあんなにも愉快さうだつた顔には、今は悲しみのかげが沈み、髪の毛は春以來めつきり白くなつた。お醫者様は、奥さんを亡くした後は、唯一つのなぐさめさして、眼に入れても痛くないほご可愛がつてゐた一人娘を、又この二三ヶ月前に亡くしたのである。それ以來、人が變つたやうに、あの元氣な快活さも、すつかり見られなくなつてしまつた。

セバスチャンが戸を開けて、恭しく迎へた。

このお醫者様は、この家では御主人ごお嬢さんだけの大事なお友達であるばかりでなく、親切な人なので、家ぢうの者に人氣があつたのである。

「變りはないかね、セバスチャン」

お醫者様は階段を上りながら、うしろからつい

て来るセバスタチャンに、氣持のよい聲でたづねた。

「やあ、ようこそおいで下さいました」

ゼーゼマン氏はお醫者様が這入つて来るを叫んだ。

「スキス行きについて、もう一度御相談申し上げねばと思ひましてね。クララはずつとよくなつてゐるのですが、それでもまだ、先生はいけないを仰しやいますか」

「いや、ゼーゼマンさん、あなたには敵ひませんよ」

お醫者様はそばに腰をかけながら云つた。

「ほんたうに、こんな時こそ御母堂がゐられる方がいいのですがね。あの方ならば、なにもかもはつきりき、萬事をうまく整へて下さるでせうに。あなたも来たなら、昨日なんか、同じこゝを訊ねるために、三度もわたしを呼び立てるのですからね。そのくせ、わたしが何ぞ御返事するかくらゐ、ちやんち御存じのくせに」

「そりやお解つてるんですよ。あなただつて、しびれをお切らしになるのは無理ありません。しかしまあ、わたしの身にもなつて見て下さいよ」

ゼーゼマン氏は哀願するやうに、お醫者様の肩

に手をかけた。

「——わたしには、娘があんなに長い間、そればかりあけくれ楽しみにして来た約束を、今更破るにしのびないんですよ。先達てびくくわるかつた時にも、よくなればスキスへ行つてハイディに逢へるごいふ樂しみがあればこそ、あんなに辛棒つよくがまんしたのですよ。それを今更、その旅行までいけないと、わたしに云へますか。實際、そんな勇氣はわたしにはありませんよ」

「しかし、決心なさらずにちやいけません」
お醫者様は權威をもつて云つた。ゼーゼマン氏が黙り込んで情けてゐるのを見るに、ちよつと言葉を途切らせて、又つづけた。

「まあ事態を考へてみて下さい。數年來、この夏ほごお嬢さんの病氣のわるかつた夏はないのですよ。それなのに、長い旅行なきをすれば、餘計疲れてわるくなるばかりぢやありませんか。以ての外のこゝです。それに、もう九月になつてゐます。あちらでは、まだ暖くて天氣もいゝかも知れないが、又もうすでに寒くなつてゐないとも限りません。日も短くなつて来るし、お嬢さんは山の上では泊れないから、たつた二時間位しか、上にゐる

間はありません。ラガツ温泉の方からのぼつて行くには、お嬢さんは椅子にのせて擔かいで行ねばなりませんから、ずる分時間がかかりますからね。要するに、出来ない相談ですよ、ゼーゼマンさん。わたしが御一緒に行つてお嬢さんに話させよう。聞き分けのいゝお子さんだから、きつこわかりますよ。それに、わたしには計劃があるのです。お嬢さんは、來年の五月になればラガツ温泉に行くのです。すつかり夏の盛りになるまでそこで湯治して、夏になれば、時々山へのぼるのです。丈夫になつてゐるから、今なんか行くより、よつぽこ面白いですよ。ゼーゼマンさん、お嬢さんを癒さうと思へば、出来るだけ細心の注意を拂はねばならないといふことを、わかつて下さい」

ゼーゼマン氏は悲しさに黙つておきなしく聞いてゐるが、この時急に立ち上つて云つた。

「先生、ほんたうのこみを仰しやつて下さい。實際のさころ、あの子はなほ見る見込みがあるのですか」

お医者様は肩をすくめて靜かに答へた。

「まつありませんな。だが、わたしのこみを考へてごらん下さい。あなたには、まだしも歸つて來

れば喜んで迎へてくれる子供さんがゐられます。歸つて來ても誰もゐないで、ぼつねんご食事をする佗びしさからは救はれてゐられます。それに、子供さんも、たごへ病氣で不自由はあつても、それを償うて餘りある幸福を享けてゐられます。ゼーゼマンさん、あなたはそれほご不幸ぢやありませんよ。あなたには、まだ一緒に暮らすといふ幸福がありますからね。わたしの佗びしい家と思つて見て下さい」

ゼーゼマン氏は、いつも深いもの思ひに沈んだ時のくせで、部屋ぢうをあちこち歩きまわつてゐるが、急にお医者様のそばに立ち止まるご、肩に手をかけて云つた。

「先生、いゝこみを思ひ付きました。わたしには、あなたのそんな様子を見ちやゐられませんが、すつり人がお變りになつてしまつた。しばらく氣晴らしをなさらないといけませんよ。——それで、さうです、あなたがひきまつ、わたし共の代理といふことで、ハイデイを訪問してやつて下さいませんか」